

「発達障害者が自信を持って働く職場」を目指す宿泊施設オーナーの信念

ジャイアント佐藤

ライフ・社会 消費インサイド 特集・連載の更新を通知

2019.3.28 5:10 会員限定 今月残り4記事

いいね! シェアする Tweet 0 BI A A



発達障害の人が苦手とするマルチタスクではなく、シングルタスクに仕事を整理して任せるなどの工夫をしている「ゲストハウスジャパン白馬」

外国人観光客に高評価の「ゲストハウスジャパン白馬」は、「発達障害者も自信を持って働く職場」をコンセプトに作られた宿。自身の息子の発達障害をきっかけに起業したオーナーの石田浩司さんに、発達障害者の特性と、彼らが生き生きと働くための工夫について話を聞いた。

「発達障害者も自信を持って働く」がコンセプトのゲストハウス

日本でも有数の雪質を誇るスキー場、白馬。世界各国からスキー、スノーボードを楽しむ人々がやってくる。

この地で日英バイリンガル対応、そして日本人特有のおもてなしサービスが受け瞬く間に人気を集めている宿が、[The Guest House Japan](#)が運営する「ゲストハウスジャパン白馬」だ。宿泊予約サイトBooking.com内の評価も10ポイント満点で9.5と非常に評価が高い。

しかしこの「ゲストハウスジャパン白馬」、実はただのリゾート宿泊施設ではない。実は「発達障害者の方」が自信を持って働けるようにというコンセプトのもとで始められた宿なのだ。

いったいどのような経緯でこのような宿泊施設を運営することになったのだろうか？ オーナーの石田浩司さんに聞いてみることにした。

石田さんの息子は「広汎性発達障害」を抱えている。現在12歳、幼稚園に入る頃に診断された。

「人とのコミュニケーション」や「周りの空気を読む力」というものは年齢とともに身についてくるものだ。例えば学校で先生が話している時には話を聞く、映画館などでは静かにするといったところだ。しかし発達障害を持っている人の場合、これらを身に付けていくことにかなり時間がかかる場合があるというのだ。

「発達障害者が自信を持って働ける職場」を目指す宿泊施設オーナーの信念

ジャイアント佐藤

ライフ・社会 消費インサイト

特集・連載の更新を通知

2019.3.28 5:10 会員限定 (今月残り4記事)

いいね! シェアする Tweet 0 B!



「発達障害」の特性は長所にもなりうる

また興味を持ったものに対して、周囲を顧みずに突進してしまってもいる。

「以前、おもちゃ屋さんで乗り物のおもちゃを見つけた時に、先に乗っている子を突き飛ばして興奮しながら乗り物に乗ってしまったことがあります。すぐに息子と一緒に相手のお子さんと親御さんに謝りましたが、当時の息子は何が悪かったのかを理解できませんでした」（石田さん）

とにかく目に入ってきた興味を引くものに反応してしまうのだ。よって目からの刺激が多い場所（例えば、スーパーやコンビニエンスストアなど様々な商品が並んでいるところ）ではパニックを起こしやすい。



オーナーの石田浩司さん。「The Guest House Japan」は今年中に2店舗目を開くことを目標にしている。「少しでも多くの発達障害者の仕事のサポートをしたい」

また、同じ発達障害でも毎日の規則的な習慣を守ること

にこだわりがある子どももいる。例えば、朝7時のバスに乗ると決めたら絶対に毎日乗るのだ。そのバスに乗り遅れれば、不安に押しつぶされてしまう。

このように書くと発達障害を持っている人間は社会生活を営むことが難しそうだと思う方もいるかと思うが、少し視点を変えてみてもよいのではないだろうか？

1つのことに食らいついていく集中力は社会で必要とされる「何が何でも成し遂げる」という力とつながるものがあるのではないか？また「朝7時のバス」の例も、「遅刻せずに決められた場所に行く」という社会で求められているものに相通じるものがないか？

「発達障害」の特性は、うまく生かせば、その人の長所となりうるものなのだ。

「発達障害者が自信を持って働く職場」を目指す宿泊施設オーナーの信念

ジャイアント佐藤

ライフ・社会 消費インサイド

2019.3.28 5:10 会員限定 今月残り4記事

0

障害者雇用の実態は 全く体制が整っていない

石田さんの前職は外資系航空会社のマーケティング部長。様々な会社の人と出会う機会が多かった。その中で障害者雇用を行っている会社の内情を知る機会も多かったという。

日本には障害者の雇用を促進し、その継続を図る「障害者雇用促進法」という法律がある。しかし、石田さんが常日頃から感じていたことは「世の障害者雇用の実態は全く体制が整っていない」ということだった。

雇用する側の、障害に関する知識が不足しているため、障害者雇用をした者はいいが、雇用された障害を持つ人間が「うつ病」などを患ってしまうケースが非常に増えているのだ。

「ただ単純労働だけを任せるのでなく、その人の得意と不得意をしっかりとわかった上で仕事を任せられる必要があります。しかし現実は、障害者というだけで本人の適性や意志も確認せずに毎日単純作業だけをさせる場合がある。それじゃあイヤになっても当然です」（石田さん）

そんな時、石田さんの考え方行動に起こすきっかけがあった。障害者雇用についてある人の話を聞いた時だった。

「知的障害のある人を雇ったけどすぐに辞めてしまった。外から見ても障害があるとわからないから、健常者と間違えて『なぜそんなこともできないのか？』とキツいことを言ってしまった。今後は障害があると見てすぐにわかる身体障害者を雇いたい」

現在こそ、障害の種類によって雇用が細分化されてきたが、この話を聞いた時、石田さんは独立を決意したという。

「こんな考え方の労働環境に、もしうちの息子が就職して理解されず傷つき……と想像しただけで、悲しさと悔しさで何も言えませんでした。その時『世の中がこんな体制じゃダメだ。もし世の中が変わらないなら、自分が世の中を変える先駆者になってやる！』と決意をしました」（石田さん）

「発達障害者が自信を持って働ける職場」を目指す宿泊施設オーナーの信念

ジャイアント佐藤

ライフ・社会 消費インサイド 特集・連載の更新を通知

2019.3.28 5:10 会員限定 (今月残り4記事)

いいね!

シェアする

Tweet

0

B!



A

A

発達障害の特性を生かした働き方とは？

まずは今までのよう勤め人をしていたのでは何も変わらない。石田さんは独立開業を決意した。

40代も半ばになり、養うべき家族もいる。外資系航空会社のマーケティング部長となれば経済的にも安定した生活を送れる。周りからの反対もかなりあったという。しかし石田さんの決意は固かった。

そして石田さんは一人じゃなかった。偶然にも同じ職場で働く同僚の娘も、石田さんの息子と同じ「広汎性発達障害」を持っていたのだ。

2人は「我々の子どもたちのような発達障害を持った人が自信を持って働ける職場」を目指して、白馬に宿泊施設を立ち上げたのだ。丁寧に子どもたちを育ててくれている妻が背中を押してくれたのも大きい。

リゾート地で宿泊施設を開くことは、石田さんの子どもの頃からの夢だった。

宿泊施設といえば接客をしながらルームメイクをしたり、料理を作ったりといわゆる「マルチタスク」が多く、発達障害者には向かないイメージもあるが、そこを可能な限り「シングルタスク化」し、勤務時間制ではなく「プロジェクトベース」で仕事をしてもらう。従業員の得意と不得意を見極めて仕事を任せることで、発達障害者の方にも働きやすいようにしていこうというのだ。

「ルームメイクならルームメイクだけ、厨房なら厨房だけに興味を持つてもらって、徹底的にマスターしてもらうんです。『発達障害』の方が持つ一瞬の集中力、規則性などをしっかり理解して仕事をお願いする。そしてその仕事のプロになって、将来ここ以外でも十分働くスキルを身に付けていってもらえると、これほど嬉しいことはありません」（石田さん）

（ジャイアント佐藤／5時から作家塾(R)）

取材協力先：The Guest House Japan

〒399-9301 長野県北安曇郡白馬村北城4980-7

0261-85-4393

<https://www.theguesthousejapan.com/ja/index.html>